

吉川元春は、戦国時代まれにみる文武兼備の良将で、毛利元就・輝元の真の補佐者として、中国制覇の大業を完遂せしめた偉勲には、実に千載不滅といふべきものがある。しかるに今日に至るまで、未だ伝記のみるべきものなきは、まことに遺憾の極みである。

予は戦国時代における中国史専攻の一学徒として、その伝記の編成に着手すること多年、各方面より確実なる根本史料を採訪収集し、これを中国各地域の実地踏査により得たる的確なる地理的基礎の上に活用して、ここに本書を編纂上梓するに至ったものである。

すなわち第一編には、元春の相統に至るまでの吉川氏史の梗概を、第二編には、元春の卓絶せる戦歴を記述し、さらに第三編には、人間元春の風貌を遺憾なく發揮するために、元春を百戦錬磨の老将として、あるいは勤王家として、あるいは神仏の崇敬者、禅学の達人として、あるいは文学の愛好者として、あるいは家庭人として等、あらゆる角度より広く観察して、批評を加えつつ、きわめて平易暢達にこれを叙述せんと期し、しかも史実には明快なる論断を下すことに腐心した。

もし本書の公刊によって、多少なりとも学会に貢献し、広く国民の史的教養の高揚に寄与するものあらば、予の本懐これに過ぐるものはない。

第一編 元春の相統に至る吉川氏史概説

第一章 応仁乱後における中国の形勢

第二章 吉川氏の祖先と元春の相統

第二編 元春の経歴

第一期 元就の武將として活動せる時代

第一章 毛利氏の芸備両国の征服と元春の活動

第二章 毛利氏の防長両国の征服と元春の任務

第三章 毛利氏の石見征服と元春の活動

第四章 毛利氏の出雲征服と元春の活動

第五章 元春の四国九州出征と山口動乱の鎮定

第六章 元春の出雲出征

第二期 輝元の補佐として活動せる時代

第一章 毛利両川と織田氏との関係

第二章 毛利両川と織田氏との衝突①

第三章 〃 ②

第四章 元春の晩年とその逝去

第三編 元春の人物

第一章 元春と武勲

第二章 元春の勤皇

第三章 元春の敬神崇佛とその文才

第四章 元春への教訓状と元春の訓言

付録

吉川元春年譜・吉川氏系図・毛利氏略系・小早川氏略系・尼子氏略系

■体裁 A5版 六五〇頁

上製箱入

■定価 一万円

■予約特価 八千円

(いずれも送料・消費税込)

■予約締切 九年三月二十日

■発売 九年四月下旬

特装版 限定五百部

▼僅少数につき、品切れの際はご容赦願います。

▼書店には卸しません。

〒745徳山市銀座2

マツノ書店

TEL 082-21195

三卿伝編纂所の史料で 描く、名将元春の生涯

瀬川秀雄著

限定五百部復刻

吉川元春



マツノ書店

苔浦より二十四五町山奥に入りたる高安原にて自刃したといつてゐる。予は三説中の何れが正確であるかを決定せしが爲に大正三年七月廿三日以來前後三回親しく實地を調査した。第一回は大江浦より分水嶺を踏破して南下し、高安原に至り、更に往路を辿り大江浦に出で、第二回は船にて青海苔浦に上陸して、詳細に高安原の地域を踏査研究した後、再び青海苔浦に出でたのである。而して此等の踏査の結果と舊記傳説との比較研究によつて、高安原が晴賢自刃の場所であることを確定するに至つたのである。蓋晴賢は塔ノ岡より大元に退き、兵船を探して発見するに至らず、更に大江浦に至つても亦兵船を発見すること出来ず、失望落膽の極此所にて自刃せんとし、三浦房清に沮まれて果さず。依て山谷を攀登して分水嶺を南下高安原に至り、暫く此地に留り、三浦房清を青海苔浦に急派して兵船を探索せしめたるに、房清も此海岸を警戒中の元春の士二宮奎助の爲に殺害せられて、亦其目的を達成するに至らなかつた。萬策竝に盡き果たので、晴賢は遂に高安ヶ原を自刃の場所と決定するに至つたものと思はれる。此地は大江浦の奥約十七八町、青海苔浦の奥約二十四五町にあり、樹木は鬱蒼として繁茂し、其下を溪水は流れ、巨巖大石はこゝ、かしこに横はり、自刃の場所としては適當であるやうに思はれる。而して陰徳記の記事を精讀するに、同書の青海苔浦は所謂青海苔の海岸地帯を意味するものにあらず、「青海苔ノ深谷ヲ杳々ト上リ行、谷川ノ水上ニ高ク重リタル巖ノ有ケル云々」の記事があることより推定するも、青海苔浦を奥深く上り行きたる高安ヶ原の地點と符合することを覺ゆるのであり。次に房顯覺書の大江浦も之と同様に、大江浦の海岸地帯を意味するにあらずして、其奥にある地點なる高安ヶ原といふやうに廣義に之を解釋することも亦可能であると信ずる。即ち青海浦及大江浦の兩説を共に廣義に解釋して、青海苔浦の奥、大江浦の奥を意味するものとせば、兩説は高安ヶ原説と合致するのであるから、房顯覺書と陰徳記・舊時記・吉田物語等の所説を否定することなく、同時に地方の傳説をも承認することが出来得るのである。予は高安ヶ原の地域の實地踏査と房顯覺書及陰徳記等の諸書の記事を廣義に解釋することにより、高安原が晴賢自刃の場所であると主張するものである。

晴賢主従は十月一日高安ヶ原で自刃し、龍ヶ馬場を死守せし弘中隆兼父子も亦衆寡敵せずして同三日自殺し、其他山間谿谷に潜伏せる者は、探索の上大半は誅戮せられ、少數の者は降服した。而して晴賢の首級は小童乙若なる者の密告により、其隠匿せられたる所在を明にし、漸く之を発見したので、嚴島戦役は結局毛利軍の大勝利を以て終了するに至つたのである。

戦後元就は宮ノ城に入り、新里・己斐の兩將が堅忍籠城したる功績を賞し、將卒一同の勞苦を犒ひ、艦で戦場に遺棄せる死骸を船に乗せ、對岸の大野に回送して、鄭重に埋葬し、血痕の附着せる土砂を除去して之を清め、嚴島大明神の社殿廻廊は全部潮水を以て洗滌せしめた後、元就は隆元・元春・隆景以下の諸將を率ゐて社參し、神明の御加護によりて大勝を得たことを拜謝し、神前に於て舞樂を奉納し、又大願寺にて萬部經會を催して戦歿者の冥福を祈らしめ、然る後に十月五日全軍を統率して對岸廿日市の櫻尾城に凱旋し、殊勲者に威狀を授け、且嚴肅なる晴賢の首實檢式を舉行した後之を洞雲寺の域内に埋葬した。艦で此地を出發して陣を小方に移し、十月八日岩國に進軍し、横山なる永興寺を本營として防長の攻略に着手したのである。

此戦役の結果として次の諸項が實現することとなつた。

- (1) 元就は三十二年間の苦心經營と交戦とによつて、完全に藝備兩國を
- て此等諸戦役に於て、元春及其部下の勇戦奮闘は殊に顯著であつた。

再復刻にあつて、本書は、三朝伝編輯所の初代所長として元就・元春・隆景の伝記編輯に尽力された瀬川秀雄氏の力作ですが、太平洋戦争末期の昭和十九年に出版された関係上、印刷ミスが多、小社では初版六冊を基に、その良い部分だけを集めて昭和六十年にこれを復刻し、直ちに完り切れました。このたび「特装版」として再復刻致します。